

霧氷をみにいこう」という話から、久子さん「あそこではいい霧氷が見られる」「とにかく寒い、だから花のような、桜の花が咲いているような霧氷が見られる」いくつかの山を登って来たけれど「霧氷に違いがあるのか」「霧氷に善い悪いが在るのか」今まで霧氷の善し悪しその美しさに違いがあるとは知らなかった「霧氷と樹氷が違うのか」という事も含めて考えてもみなかった。2,3日前から急に寒くなりだし、天気予報で日本海側一帯は、本格的な雪模様、全国的に今年一番の冷え込み、冬到来などといった。

6:15 車に乗り、近畿道：摂津北ICから松原経由、西名阪道路：柏原ICで降り、藤原京跡地・大宇陀・東吉野・高見山トンネル・蓮ダム・569号線を奥へ、ヌタハラ谷手前、目的地の登山口に着いたのは8:50だった。車に揺られた時間は3時間弱だったが、帰りは16:00 出発で3時間半もかかった、世間の働く皆さんが帰宅時間、ラッシュアワーの所為だろう。

「ひむがしの 野にかぎろひの 立つ見えて かえり見すれば 月かたぶきぬ」万葉集、柿本人麿が大宇陀で詠んだ歌、東の山は今の台高（台高とは大台河原と高見山を結ぶ）の峰々、走りながらその辺りを見上げると黒い雲がべつとり貼りついている「今日は後半から崩れ始め、明日は雨が降るとは言っていたが、雲行きが怪しいねえ」と話していると、雪を屋根に被った車2,3台と行き違った。「え、あの雪、あの車、何処から来たのかな」東吉野に近づくにつれ空はますます暗く寒そう、雪が表れてきた、積もっている。「さっきの車はこの辺りから来たんだ」と納得はしたが、家々の屋根も田圃も雪化粧、山を見上げると白くなっている。「思ったより積もっている、上は何センチぐらいの積雪かな」県境のトンネルを超えると晴れている「外気は同じように寒そうだけれど、日が照っている分温かそうだ」と話しているうちに車を止める場所に到着した。「いくら山の上が白とはいえ、関西の山、三重県の山、そんなには積もっていない」と言いながら登山服に着替えた。雨具のズボンを履きスパッツを着けた。「ピッケルは持っていこう」「アイゼン、ワカン是要らない」「毛糸の手袋が在るから、オーバー手袋は要らない」「上はシャツ2枚とヤッケでよし、歩き始めるとすぐに汗が出る」「フリーズとダウンの上着はリュックに詰めていこう、歩きだせばすぐに温かくなる、暑くなる」「飯は弁当とサンドイッチ、まさかこの寒さ、水も2リットルもあれば、コーヒーも十分に沸かせる」

今日の登山道、ほとんど目印も赤いテープも無く急登の連続、一本二本と元気よく登れたが三本目ぐらいからやや疲れが出てきた、昨夜「朝5時に起きなければ」と風邪薬を飲んで寝た、夜中に4回も目が覚め、4回もトイレに立った、こういう時の翌日は体力が激減している、歩きながらへとへとになる「山に登る前の日は熟睡しなければいけない、アルコールを飲みすぎもいけない」とにかくしんどいと思いつつ登った。雪が出てきた、車での道中の山の雪を見て「ピッケルとスパッツが要る、アイゼン、ワカン是要らない」と判断したが、「オーバー手袋を置いてきてしまった」要らないというように判断したが、上は寒い、風がきつい、雪で濡れた毛糸の手袋から冷気が伝わる、10本の指全部が痛くなる、ものすごく痛い、カメラを出して写そうとするが、痛さに耐えきれず写すのをやめた、あきらめた。

「ちょっとばてているな」と思いつつ、やっと尾根道にたどり着くと、景色が一変した。穏やかな広い空間にポコリとこぶが在る、なだらかに窪地が在る、木々に霧氷が付いている。この辺りの山は植林された針葉樹が隙間なく茂っている、その針葉樹林帯を抜けるとブナが出始め、広葉樹林帯になってくる。尾根に在る木々の種類はわからないが、葉が落ち枝だけになった木々に、霧氷がびっしり着いている、白い氷が付いている、窪地には木々がびっしり生えている、そのびっしりにも霧氷が着いている、それこそ枝が白く見える、花のように見える、なるほど華々しいと思いつつ「指が痛い」「寒い、冷たい」「オレは寒がりだ」この山「微妙な処」と表現する「ちと危険な処」がいくつか在った。上り下りも急斜面、目印も標識もほとんどなかった。「ここは一人では来れない」危険な処は慎重に歩いた、急斜面は「こけたら痛いだけ」というとおり「10回は、ひっくり返ったかな」最後の急斜面は杉の植林の間をずるずる滑るようにゆっくり下った。車の前で着替え、コーヒーを沸かした。最後のずるずるで汗びっしょりになった。車の中で風邪がぶり返してはと、暖かく着こみ、菓子に果物、コーヒーを飲んで帰途に着いた。この山、霧氷の季節もいいが、暖かい頃もいい処だろう。この山は東吉野から明神を超えても来られる。

風邪を引いた。と書きながらいつも普通にそういつているが何故“引く”なのか調べてみた。漢方では“ふうじゃ”という“じゃき（邪気）”が背中“ふうもん（風門）”というツボから体内に侵入する「ふうじゃを引き寄せる」ということで“引く”で正解だそうだ。今回、先日の檜塚奥峰、この山に行く前からぐずぐずしていたが「大丈夫だろう」と高をくくって登った、途中で多少へばったのもその所為か、翌日運動後のシャワーをし、その後の寒気がいけなかったのか、咳、痰、喉痛がひどくなり「これは自力では治らない」と向かいの須藤耳鼻咽喉科へ、「4日分の薬を出しておきます」朝の時点でその薬を飲んで24時間ほとんど布団の中、やっと何とか回復状態、朦朧としているが、気を取り直し、これを書いている。昔から風邪はあまり引かない身体だった、前で咳やらクシャミやらされてもなんともしなかったが、一度風邪状態になるとなかなかひつこく、治るのに時間がかかった。治りが遅い、治りかけると咳に痰が絡み、鼻汁も粘っこくなってくる。それから何日かすると普通になっている。今回ももう半日早く、寒気が出た時点で医者に行けばよかったのかと反省。医療費1300円也。

立松和平くくこの間男体山に登りました。登った時にはものすごく体調が悪くて、登った方がいいが真っ暗になってしまったんです。今、百霊峰巡礼というのをやっているのですが、それでカメラマンと編集者もいたんですけど、懐中電灯をだれも持っていなかった、山をなめていたんですね。僕が足を引っ張っていたんですけど、とうとう真っ暗になってしまって、周りが見えなくて動けなくなったしまった。遠くの中禅寺湖畔に光があるんです。その光はこっちに来れば救われるよといってくれているわけです。でも僕が欲しいのは足元の光で、どんなに心細くてもいいから、この足元の一步をどこに踏み出せばいいのかを教えてください光なんですよ。それで仕方なく、ゆっくりゆっくり足元を探りながら下りて行って、そうしているうちに、本当に真っ暗になりました。そうしたら前にポツツと懐中電灯の光が見えたんです。見ると、おばあさんがへたっていたんです。自分は男体山に登りたくなくて登り始めた。そうしたらもうこんなにきつい山とは知らなかった。お弁当も食べられなくて、ここまで来て身動きが取れなくなりましたというのです。それで僕らも会えてホッとしているわけです。僕らは完全に闇の中にのまれて、一步も足をどこに出していいかわからない、おばあさんは身体が弱っていたけれども懐中電灯を持っていました。つまり人を救うという事は、あなたは右足をどこに出しなさい、左足をどこに出しなさいと教えてくれることだと、その時僕は切実に思ったんです。僕らはそのおばあさんを励まして山を下り、息子さんの保養所に泊まっているというので、そこまで送っていった。その女性は「本当にありがとう、助かりました」と何度も何度も僕らに言うのです。僕らは「そうじゃない、救われたのは僕らです」とこちらも何度も何度も言いました。「あなたの懐中電灯があったので下りてこられたんですよ」と言いました。救いというものは、救ったんだか救われたんだかよくわからないことが多いんですよ、その時に僕は暗い山で迷って時に、自分を本当に救ってくれるものは、前を歩いている人、ちゃんと方向を示してくれる人だと思いました。どこに行っているのかわからなくなってしまったんですから。

先日何人かで飲んだ折「岡村さんは、寺社仏閣の前に行っても額ずかない、挨拶をしない」「必ず敬虔は気持ちで礼をする」「何かを祈る」「神社では一礼二拍手一礼・・・」「仏式では数珠を持って・・・」「わたしも必ずそうするよ」などとそのような話が飛び交った。オレは、我ながら勝手なもので切羽詰ると、窮地に陥ると「神様仏様助けてくださいともいう」切羽詰り窮地に陥ちてからしか出て来ないとは呆れたものだ。「山川草木悉皆成仏」これが仏教の言葉だと以前に知った。人だけじゃない、動物も植物も、石ころや水までもが 幸せになる、仏になる、という言葉。「オレは、この生きている存在こそが、神なのだ、オレ自身が神なのだ」とほざきたくもなる「昨今の有名寺社仏閣はどうもね」とにかく世の中市場主義・拝金主義の傾向がこんな社寺仏閣にまでどっぷり押し寄せている。「ごらんなさいあの荘厳な建物」「庭園は掃き清められ、屋根も壁も新しく着飾っている」「あの荘厳さが尊いのか」「一段高い処に鎮座する、石か鉄が有難いのか」「キンキラキンに荘厳さ、有難さを求めてなんとする」オレは日常攻めることも、責めることも無くなった、欲しいものもなくなった、「どうじゃ」尻からげて走り回りたい。ただいまこの寒さ、この体調の悪さ、尻からげるところか、服の1枚も脱げないけれど・・・。

The Power of Images<イメージの力>民族学博物館（大阪万博公園内）この展示会には二度も足を運んだ。一回目はチビ君が“なまはげ”をもう一度見たいというので連れられて行った、会場に入った途端、展示空間の中に身を置いて、いくつかのお面に遭遇した。「何故こんな形になるのか」「こんな造形物になってしまったのか」という疑問と、その形が持つ力、美しさに見とれ、人間が持っている、物を造る、形を形成するイメージの力に圧倒され驚いた。この展示会がThe Power of Images<イメージの力>と名付けられているが、上手い命名だとこれを書きながら思った。幾多の国々のお面が壁一面に飾り付けられていた。日本人である自分が馴染みのある国々のものは「見たことがある」とすぐわかるが、その他の地域で、初めて見るその造形たちにはえもいえぬ感触を得た。

<パンフより>私たちは、ふいに仮面に出くわしたとき、一瞬、身動きすることもためられるような心の震えを感じます。展示物（お面）というイメージを「見る」場から、イメージと人との間で「見る/見られる」という相互作用が成立する場へと変貌することになります。

世界各地の土俗的な人たちが、それぞれの想いで造った形、お面であり、人間の身体であり、人間の身体の集合であり、動物の形であり、ほとんどが具象性を持った造形物だ。それらを見ながら話を想像してみた。木に彫られた面、人間の等身大の何倍かあるような大きな面、黒光りするその面は信仰の対象なのか。何色かに彩色された人面を超えて右へ左へ飛んでいる面、それでも人面だとオレにはわかる、装飾品として凜と屋内に安置されていた。墓場に立つ背の高いポール、人の形が上へ伸びている、墓場の番人、死者が宇宙と交信をして帰って行く様が見える。これらが近代的建造物の中の展示場に在っても、一様に迫力はあるが、元にした場所、使用していた状態で遭遇していればその存在感の凄さが想像できる。呪術師が実際に使っていた面だと想像するだけで、その臨場感はぐんと違ってくる。呪術師の言葉、死や生、上や下、時空を超えた空間にまつわる言葉が吐き出されていたお面だと想像するのはなんと恐ろしい事か、なんと重々しいお面か。墓に立つポール、人の形が何重にも重なって上へ伸びたポール、その下には死者の土饅頭がポッコリ膨らんでいる。昼夜そのポールが風を受け、闇を、光を、雨をうけて飄々と立っている、死者を救い、魂の浮遊を見守っているのか。<パンフより>高く見上げるような造形を通じて、高み、つまり「他界」や「異界」とこの地上の世界とをつなごうとする造形が、文化の違いを超えて広く分布しています。

<パンフより>人類の歴史は、イメージの歴史でした。イメージは文字に先行し、さらには言葉の源になったと考えられます。世界のありかたに形や色を与えて視覚化することは人間に与えられた根源的な資質の一つだといえるでしょう。このイメージのつくり方や受けとめ方に、人類共通の普遍性はあるのでしょうか。<中略>この問いに対する答えを体感的にさぐってみようという試みです。このため、この展示では、人々のつくりだしたイメージを地域や時代ごとに分類するのではなく、イメージの持つ造形性や効果、機能に着目して提示しています。<中略>美術（アート）と器物（アーティファクト）、美術館と博物館、美術史学と文化人類学、西洋と非西洋といった、日ごろわたしたちが当たり前と思っている区別があらためて問い直す試みでもあります。

<パンフより>光り輝くもの、色鮮やかなものを身に纏い、所有する者の富や権力を際立たせます。また衣服や容器の表面に取り付けられた鏡や金属、金糸銀糸の刺繍飾りは、それを身に纏うものの身体を守るとされています。そこには光と色に対する文化を超えて共通した反応がうかがえます。

今回この展示会で感動したのは、我が<Figure-檻褸君>にそっくりなものがあったからだ、何処の国？それを見るのは忘れたが、彼らと同じ意匠、造形、肢体には大いに気に入った。とにかく世界の土俗的な部分はまだまだ未知なものがあるとわかった。現地に行ってみたいものだ。

ただ最後の方で、現代美術のインスタレーション的発想で展示されているコーナーがあったが、これは嫌だった、パンフには「博物館所有資料の器物が、現代美術に変貌するのを目の当りにできるはずです、と謳っているが・・・。

この2.3年愛宕山によく行っている「愛宕なんて、嫌だよ」なんて生意気な事を言っていた頃もあったが、少し疲れた時の足慣らし、気軽に行けるということで行っている。そういえば阪口さんと最初登ったような気がする、てっぺんの神社の石段や石畳が凍っていた、老若男女が運動靴にでも付けられるような軽アイゼンを付けていた、暗い空にロウソクの火が目に焼き付いているが、まさか夜ではなかったと思う。昨日もどんより薄暗い空、吹き付ける風は冷たい、横着をして石段を登るのを省き、屋根のある休憩所で昼飯を取った、屋根はあるが壁は三方だけ、冷たい風が吹き付ける、火を焚いても暖かにならない「冬の食事はテントの中に限る」これを忘れていた、寒い思いをした。今回は相・前・オレの3人、阪急茨木駅を8時に出発、8:45嵐山発：清滝行に乗り簡単にトンネルを超えた処まで。バス代230円は値打ちがある、というのは、嵐山駅を出てからトンネルを超えるまでバスなら10分で着くが、歩くと40分50分はかかる、昔は「バスなんて」とせせら笑っていたけれど、この10分の座っている時間が有難い「ラッキー」というようになった。因みに茨木から嵐山までの阪急電車は320円、これはもっと値打ちがあることを言わなければ片手落ちかな。いつものように月輪寺方面に向かう。ゆっくり40分ほど林道を歩くと、左に登山道「月輪寺に向かう登山道は、整備のため、200円納めてください」という紙「愛宕山頂まで2時間」という紙「上り下りで半日かかる山なので、気軽に登らないように」とも書かれた紙。

気軽にという事で思い出すのが5年ほど前の富士山、いつもの澤山グループと11月下旬の連休に富士山に登った。夕方五合目に着き、皆さんは山小屋、オレは車の傍でテントを張って寝た。朝早くから登り始めた。五合目辺りに雪があったかどうかは忘れてしまったが、六合目七合目と登り出して風が出始め、陽が陰り、雪が凍てつき始め、アイゼン・ピッケルで頑張って登っていた。その辺りまでは登山靴だけの人もいたが皆さん撤退し、ほとんどの人がアイゼン・ピッケルを使ってゆっくり登っていた。八合目を過ぎた辺りから、雪が固くなり「ちょっと怖いな、転んだら、滑り台一直線」という雰囲気になってきた。どの辺りで撤退したかは忘れたが「下りの方が怖いな」と思いながらそろそろ下った。少し遅れて下ってきた澤山さんが「オレの横を滑落して滑っていった人がいた」「むちゃな若者がいて、登山靴だけで立ち往生していたので、その子を一步づつ歩かせて降ろしてきた」と怒っていた。その日の新聞を後日読むと「富士山で5人滑落、重軽傷」と出ていた、死者はいなかったようだが、一度滑り出すとなかなか止まらず、岩か何かに衝突して死亡事故になるようだ。

フウフウ言いながら録音「あれれ 電信柱が見えてきた ということはもうすぐかな 大きい声で言うと もうすぐぐっと言った割にはまだ着かない と駄々をこねられても困るが それともあと20分30分はかかるかな」などと小声で。去年は3月に同じメンバーと来た時には、この辺りから持参の軽アイゼンを付けてもらって、真っ白い雪の中大いに感動されて登った。今日は雪ゼロ、微かに何日前に降った白さが、そう言えばあれは雪かという程度に残っている、ほとんど乾いた空気、冷たい空気が肌にあたる。この山はほとんどが杉の植林、他所に比べると手入れされ、枝打ちされ、太さは30年ぐらい経っているのだろうか、後10年20年もすれば立派な杉の木になりそうだ。12月3日に久子さんと台高に登った時、スギの植林を登り切ってもうすぐ乗越という辺り、急に寒さが襲ってきて、「寒い」と頂上も早々に慌てて降りたが、その二日後に風邪をひき、4日ほど寝込んでしばらく体調が戻らなかった。4日間の薬をもらって、毎食後に飲んでいたが、治りが遅く、薬が無くなっても治らないのでは、まだまだ寒気が取れない「もう一度薬をください」と行かねばならないのか、と迷っていたが、薬が無くなって翌日、その翌日と日々回復していった。風邪の間は、朝布団をたたみ、飯を食ってアトリエに上がるが何もする気が起こらず、また布団を敷いて寝てしまう、昼飯を食っては寝てしまう、晩飯を食っては寝てしまう、ほとんど病人のように寝ていたが、安威川詣では一日休んだだけだった。病を持っている人、付き合っている人はこんな状態なのだとしみじみ思わされた健康を考えた何日かだった。

上では澤山さんのコフェルでうどんすき。このコフェルは欲しかった。彼が棄てるのをさぼったガスボンベもリュックにいっぱいアトリエに在る。そのちょっとづつ残ったガスボンベ今回4本持って上がった。

Willerm De Kooning<ウィリアム・デ・クーニング>の話。

友人がアトリエにやって来た。「上は、寒いよ、コートのままで、上がってきて」しばらく会っていなかったが、足取り軽く上がってきてアトリエの絵を見ながら「こないだ、デ・クーニング展を見てきたよ」「・・・？」とっさにその名前を言われ、どんな絵描きか、アメリカの絵描きのはずだが、名探偵ポアロふうに言うなら、オレの灰色の脳細胞も多少は駆け巡ったがすぐには思い出せなかった。キース・ヘリングと間違っていた「知っているぞ、その人・・・」オレは首を傾げながら聞き入った。「素晴らしかった、その展覧会、絵を前にして、彼の息吹、筆致がぐんぐん伝わってくる、素晴らしかった、よかった・・・」と大絶賛、帰ったらすぐに検索してみようと思ったが、彼が居るその時に検索をすればよかった、あの絵なら、絵描きなら話すことがたくさんあった、聞いてもらいたかった、デ・クーニングの話をしたかった。彼が帰った後パソコンで検索した「おおお、デ・クーニング、これか」と絶句、一瞬思考が止まり、見づらい小さい画像だが見入った。ごてごてと油絵絵具で描きなぐった絵、具象の形を残しながらも抽象化していく過程の絵「俺はこの手の絵が好きだ」と叫びながらも黙って思考が止まった、嬉しいものに突き当たった、年の暮れに嬉しいイメージが飛び込んできた、このイメージでしばらくは遊べるぞと思った。

絵画なんて、たかだか〇〇センチ×〇〇センチというような大きさの平面に、たかだか何色かの絵の具で、区切ってゆく、〇〇センチ×〇〇センチというような大きさの中で、少しづつ面積を区切ってゆく、その面積に色と色が混ざり合って平面の上に載っている、区切られた面積、次の面積、その次の面積に、次々色が載っている。たかだかそれだけの物じゃないか、たかだかそれだけの事じゃないか、とは言うけれど、たかだかそれだけなのだけれど、世界がひっくり返るように、考え、試し、失敗し、それでも毎日描いている、叫んでいる、唸っている。そんな馬鹿な奴がたくさんいて、暗い顔をして過ごしている「上手いかねえよ」「昨日はよかったんだが、今日はだめだ」というような具合にため息をつき、恨めしそうな眼を天に向け、自分の昨日今日が世間とは社会とは全く関係が無い、鼻にも引っかからないことを悟りもせず、うだうだ、世界の一大事のように、地に涙する。10年20年30年、同じことを続けていれば、よほど下手くそな輩でも、それなりに上手くなる。色を見分け、絵の具が走り、筆が躍る。それぞれみんな「上手いじゃないか」「ここの処は惚れ惚れするねえ」なんて世辞を言われ、煽てられ、買ったたかれ、いつも貧困に喘いでいる。「それだけじゃいい絵は描けない」「上手いだけじゃダメなんだ」「少々うまく描けても、そりゃあ、ちっともよくない、いい絵じゃない」なんて能書きを垂れ、地を見て天を見ているが、前が見られない。大きな顔をして文化を語り、歴史を語り、想いを語るおっさんたち、おねえさん方、「そらあ絶対なんてものは無いからねえ」「拝金主義はいけないよ」「市場主義もいけないよ」「でも、十羽一絡げに白黒を付けちゃ、もっといけないよ」などと、本人も收拾のつかない饒舌の状態に、これはいけない、苦笑いである。

Karel Appel<カレル・アペル>の事はいたく気に入っている、デ・クーニングは1904年、カレル・アペルは1921年二人ともヨーロッパ生まれ（オランダ）デ・クーニングは20歳代にアメリカに渡って絵を描いている。ヨーロッパ絵画のしっぽを引きずってアメリカで制作している。ヨーロッパの上手さ、アメリカの何でもありというおおらかな精神、これらが合い混ざってあのような絵に発展していった。この二人にしろ、Jean Dubuffet<ジャン・デビュッフエ>にしろ、晩年の絵は好きじゃない。お洒落に、抽象化し過ぎている、あの抽象化なら、アメリカ生まれのアメリカの方が洗練されて美しい、と思っているのはオレだけかな。いずれにしてもアペルやクーニングの絵はオレにとって素晴らしい、あの精神は取り入れたい、オレの今の絵が少しでも彼らの精神に近づきたい。

以前画商がぼやいていた。「営業で回りますが、ちょっとした名のある企業、会社、組織に行っても、いい絵は飾っていませんね」「百貨店で売っているような仕様も無い絵、昔人気のあった売れ筋の絵、つまらん絵を応接間やホールに堂々と飾っている」「彼らのセンス、文化度、疑いますねえ」確かに彼の言う通り「もうちょっといい絵を飾ってくださいよ」といいたくなる。

万葉集の本を2冊も借りてきている「お前そんな事も知らなかったのか・・・」と思いつく色々な顔から罵らせそうだが、若い頃は全く興味が無かった、学生の頃はその勉強はしたけれど、試験が終われば忘れてしまった。本の中、小説の中でも詩歌の部分になると飛ばしていた。「お前、だらだら説明文より、肝心の詩なり、歌なりを読まない、感じないと・・・それはだめだ」またもや天の声が聴こえそう。40歳代、近所の摂陵高校の国語の先生をしている悦子さんから「和歌の先生の文章に、抽象的な挿絵を描いて」とありがたい依頼があった。原稿用紙4.5ページの資料をいただき、読み、いくつか挿絵を描くというシリーズが何年か続いた。手元に本が無いので内容はすべて右から左に忘れてしまったが、万葉集の和歌を並べ、学者の先生らしくその解説が面白く書かれていた、和歌に真面目に接したのはその時が初めてだった。

「お前そんな事も知らなかったのか・・・」初めに万葉集とはこういう事かと驚いたことをひとつ。万葉集は日本最古の歌集、「古事記」「日本書紀」と共に文学史の先頭におかれる。万葉集は「漢字」で書かれたものである。「かな」が既にあったにもかかわらず、「漢字」で書く、「どう読むのか、漢字自体に意味はあるが、それを生かすのか、無視するのか」後世の学者の喧々諤々は想像がつくが、そのような難しい事は先生連に任せておくとしよう。いくつかの歌を詠んでいて、長い歌「長歌」に魅かれる、これを「かな」だけの文字で声を出して読むと、1500年前の人たちの声、音が聞こえるような気がする、昔の言葉、昔の語り口調が聴こえるような気がする。「お前、それは、和歌を愛でる本質から、外れているのと違うかね・・・」と小言を受けそうだけれど、山上憶良・柿本人麻呂の一節を載せます。

貧窮問答の歌 山上憶良

かぜまじり あめふるよるの あめまじり ゆきふるよるは すべもなく さむくしあれば かたしほを
とりつづしろい かすゆざけ うちすすろひて しわぶかひ はなびしびしに しかとあらぬ ひげかきなでて
われをおきて ひとはあらじと ほころへど さむくしあれば あさぶすま ひきかがふり めのかたぎぬ
ありのことごと きそへども さむきよすらを われよりも まづしきひとの ちちははは うゑくゆらむ
めこどもは こふこふなくらむ このときは いかにしつつか ながよはわたる あめつちは ひろしといへど
あがたmrは さくやなりぬる ひつきは あかしといへど あがためは てりやたまはぬ ひとみなか
あのみやしかる わくらばに ひととはあるを ひちなみに われもなれるを わたもなき めのかたぎぬの
みるのごと わわけさがれる かかふのみ かたにうちかけ ふせいほの まげいほのうちに ひたつちに
わらときしきて ちちははは まくらのかたに めこどもは あしのかたに かこみいて うれへさまよひ
かまどには ほけふきたてず こしきには くものすかきて いひかしく こともわすれて めえどりの
のどよひをるに いとのきて みじかきものを はしきると いへるがごとく しもととる さとをさがこえは
ねやどまで きたちよばひぬ かくばかり すべなきものか よのなかのみち

近江の荒れたる都に過（よき）る時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌

たまだすき うねびのやまの かしはらの ひじりのみよゆ あれましし かみのことごと つがのきの
いやつぎつぎに あめのした しらしめししを そらにみつ やまとをおきて あをによし ならやまをこえ
いかさまに おもほしめせか あまざかる ひなにはあれど いはばしる おうみのくにの ささなみの
おほつのみやに あめのした しらしめしけむ すめろきの かみのいみことの おおみやは ここときけども
おほとのは ここといへども はるくさの しげくおいたる かすみたち はるひのきれる ももしきの
おおみやどころ みればかなしも

反歌 ささなみの しがのからさき さきくあれど おほみやびとの ふねまちかねつ
ささなみの しがのおほわだ よどむとも むかしのひとに またもあわねやも

もう年の瀬、ICレコーダーを持ちながら河川敷でぼそぼそ録音した。「今、年の瀬、安威川、河川敷を走っている、歩くよりも少しは早いというような遅いスピードで走っている」「もう世間は正月休みに入ったのか、人が多い、歩く人走る人、冬の季節、普段はひとりに会うか会わないかというような淋しい処なのに。前の方にはたくさんの人ばかり、50人は居そうな団体が橋の下に居る、バーベキューでもしているのかな」いつも折り返しの場所、ここまでと橋を過ぎた処に設置されたベンチに服を、タオルを、水を置きストレッチをする。ストレッチを始めたのは5年ぐらい前から、それまでもしてはいたが5分ぐらいで切り上げていた。走るだけではだめ、筋肉トレーニング、ストレッチを十分にしないと、ということはわかってはいたけれど「ええい邪魔くさい、これだけ走っているのに、まだストレッチが必要か」などと勝手に解釈をして早々に切り上げていたが、最近は真面目にという言葉はおかしいかもしれないが、15分20分と時間をかけてやっている。まずベンチに荷を置き、モンローウォークさながらの歩き方、腹を腰を振る、そのうち足を蹴りあげる、足も最初はなかなか高く上がらなかったが、今は目の高さに簡単に上がる。腕立て伏せ、これも若者のように身体を深々と鎮めるまでにはいかない、ちょこっと折り曲げるだけだけれど100回ぐらい。水辺の棒に掴まって横に後ろに足を上げる、これも始めた頃はなかなか高く上がらなかったが、今は結構できるようになった、自転車に乗る時も足をぴんと後ろに跳ね上げてサドルに跨るのが簡単にできる、これは子供のころから50歳代までは簡単に出来ていたが、いつのまにか婦人用自転車ではあるまいが、前から足を入れてサドルに跨っていた、たまに後ろに蹴り上げると、ひっくり返りそうになっていた、それが簡単にできるようになってきた。次に、大きな声では言えないが、水辺の棒、コンクリートの疑似木を抜き取るぐらいの気持ちで力を入れ押したり引いたりしている。後は色々な処のストレッチ、これらに時間をかけると気持ちがいい。そのベンチの対岸に彼が居る、距離は50メートル以上はあるのか、おぼつかない目では詳しい事はわからない。こんな寒空の下、橋の下といっても土手と橋の狭い隙間にホームレスがひとりで暮らしている。男で、自転車を持ち、ブルーシートらしきものもある。その他のこまごました事はわからないが、全部自転車に積んで何時でも移動できるというような荷物しか持っていない。弁当のようなものを食べていたり、雑誌を読んでいたりと、右へ左へうろうろしていたりとそのような事しか判らない、顔はもちろんわからない。今日は風が無いけど空気は冷たい、川の水は流れている、凍ってはいない、水たまりも凍ってはいない。2,3日前から別のベンチに傘を2,3本立てかけ毛布にくるまったホームレスが寝ている。先日大阪に電車で行った時も淀川の河原で10張程のブルーシートの小屋を見た。またもや年の瀬、ホームレスが増えてきたのかもしれない。カモが居る、3匹ほど、水際を歩いている、オレが走って近づいても歩いて逃げただけで飛び去りはしない。「シベリヤからですか、それともここにずっと滞在ですか」カモやらカモメやらの団体飛行編隊が見られる季節、わざわざシベリヤからご苦労さん。そういえば三脚の上に望遠鏡を付けて覗いている紳士「これは東南アジアから来た鳥です、写真を撮りたいが逆光で」スズメより少し大きい鳥だった。

塚口義男著<継体天皇の出自を探る>日本の天皇家は万世一系ではなく、少なくとも古代に三つの王朝が興亡した。これは戦後間もない昭和27年に提唱された、水野氏の王朝交替論の基本的な構想です。日本の古代には、古王朝<呪術>中王朝<征服>新王朝<統一>という三つの王朝が存在した。これには議論もあるが、6世紀初頭に即位した継体大王<507年~531年在位>をもって新王朝の創始者とみなされるのが今日の有力な学説として定着している。

“天皇”という称号が日本で使われたのは7世紀後半の天武天皇からだというのが有力な説、これも木簡に書かれているものが出土したという事実から。

此処で幾つかの疑問が湧いてくる。1) 高槻市に在る今城塚古墳に“だいおうの杜”と書かれている、これは“おおきみ”ではないのかな。それともどちらでもいいのかな。2) かの有名な“仁徳天皇陵”この仁徳本人さえ、いなかったのかな。現在は“伝仁徳天皇陵”というらしい。その他の天皇の名前も“古事記”“日本書紀”に書かれている。この二つの本を史実として信じている人、単なる神話、物語だと言っている人がいるようだけれど、まだまだ日本人の中には「これは史実だ、神話なんかではない」と主張する人が多い、オレの周りにも多い。3) 政府は、天皇家は、宮内庁はこれらの幾多の古墳の発掘を禁止している。天皇家が主張するのはわかるけれど、国までもが禁止するのは不思議だね。いずれにしても誰もが大きな声で「そんな人は実在しなかった」と言わないのが不思議。